

博士学位論文審査要旨

2017年12月2日

論文題目： 古代日本語の因果関係を表す接続表現
——漢文訓読の影響を中心に——

学位申請者： 楊 瓊

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 藤井 俊博
副 査： 文学部 教授 垣見 修司
副 査： 文学部 助教 山本 佐和子

要 旨：

本研究は、古代日本語の因果関係を表す接続表現を取り上げ、漢文訓読とりわけ仏教漢文の訓読の影響において、日本語の文法表現に影響したものが、それらが中世の和漢混淆文にいたって広く用いられ定着した過程について研究したものである。

取り上げた語句は「によりて」「ゆゑ」などの接続表現と、「しからば」「さらば」のような接続詞である。これらの因果関係を表す表現は日本語では元来未発達なものであり、漢文訓読の中で接続表現として定着し、中世の和漢混淆文に定着したものである。従来の研究では、「によりて」は、変体漢文の使用を受けて中世に定着したとされていたが、和文の「により」も視野に入れて平安時代の文献を再検討した。これによって、上代に用いられた用法が自然に定着し、更に仏教漢文の「依」の訓読の影響でプラスの意味に用いる用法を獲得したことなど、用法面を詳細に検討し、従来の文法研究を深化させている。「ゆゑ」の場合でも、奈良時代では体言に接続して用いたものが、平安時代になると漢文訓読文では「活用語連体形+ゆゑ」の形と「活用語連体形+ガユエ」が併存したが、後の漢文訓読文では「ガユエ」、和文では「ゆゑ」というような傾向の差異を指摘しつつ、平安期の和漢混淆文では漢文訓読型が、鎌倉期の和漢混淆文では和文型が定着したという表面的な変遷をのべるだけでなく、作品の背後にある僧侶の実用文の世界を視野に入れた立体的記述に及んでおり、文体を配慮した文法事象の記述により用法の展開をより具体的に論じることができている。「しからば」「さらば」の検討においては、漢籍仏典の影響を受けた日本書紀の「しからば」の用法と、漢籍仏典の影響ではなく、自然に発生した古事記の「しからば（然者）」の用法があり、後者が平安時代の「さらば」に受け継がれつつ後に漢文の影響で用いられた「しからば」の影響も受けた過程を明らかにしている。これらの考察では、文体別の用法を配慮するとともに日常言語の用法を背景に配慮した考察を試みており、従来の記述を更に深化させる観点がある。むろん、前提となる、和文や、和漢混淆文の文体がどのように成立したか、その中でこれらの対象語がどのような位置を占めるかという大きな課題は含んでいるが、漢文や和文の各種文献を子細に解釈・検討する実証的方法によって文法記述に新たな視点を提示した点は評価される。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2017年12月2日

論文題目： 古代日本語の因果関係を表す接続表現
——漢文訓読の影響を中心に——

学位申請者： 楊 瓊

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

副査： 文学部 教授 垣見 修司

副査： 文学部 助教 山本 佐和子

要 旨：

上記審査委員3名は、2017年12月2日、午後1時から約3時間にわたり、徳照館2階の第2共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、審査員からの質疑応答に対して、提出論文についての日本語史および日本語文法に関わる専門的知識はもとより、関連する日本語資料や漢籍仏典などの知識を含む関連諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。また、ひきつづき行われた語学（英語）試験においても、十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 古代日本語の因果関係を表す接続表現

——漢文訓読の影響を中心に——

氏名： 楊 瓊

要旨：

日本語の因果関係を表す接続表現は、さまざまな文法的形式によって表される。本研究は、古代日本語における因果関係を表す接続表現の一端について、文体的位相を配慮しながら、それらの発生と定着を考察したものである。具体的に取り上げるのは、「(が) ゆゑに」「によりて」のような複合辞、及び「しからば」「さらば」のような接続詞である。また、接続詞の使用傾向と文体とのかかわりを見るために、数量的調査を行った。

第一章では、原因理由を表す「によりて」の成立と発展について考察した。まず、第一節では、体言を受ける用例を中心に、原因理由を表す用法の成立、および良い結果の原因を積極的に表すプラス的用法へ拡張する経緯を論じた。『万葉集』において、動詞「よる」が〈(具体物が場所に) 距離的に接近・移動する〉と、そこから抽象化された〈(心や気持ちが人に) 寄せる、寄り添う〉の意に用いられており、さらに、「名詞+により」の形になると、後続表現の述語にかかって、〈もとづく、起因する〉の意となっている。その後、「により(て)」の形で、原因理由を表す表現として固定化していた。このように、「により(て)」の原因理由を表す用法は上代語において既に成立しているものであり、日常言語の中で文法化したと考えられる。しかし一方で、原因理由を明示する用法において、良い結果の原因を積極的に表すプラス的用法を用い始めたのは、漢文訓読、特に仏教漢文を訓読した結果と考えられ、平安時代以降、僧侶らの手による仏教漢文や和漢混淆文に、非プラス的用法と交えて多用されるに至ったことを明らかにした。これは、漢文訓読という翻訳行為の中で、加点者が「依」などの漢字によって結び付けられる前件と後件とが因果関係にあると認識して、「依」などを「ニヨリテ」と訓んだが、漢字「依」などにある「頼る・助く」の語彙的意味に影響され、良い結果の原因を表す機能を持つようになり、「によりて」の表現範囲が広がった結果と考えられる。第二節では、第一節で述べた「により(て)」の原因理由を表す用法は上代語において既に成立していたことを受けて、用言を受ける接続助詞的用法の「により(て)」を中心に、和文、漢文訓読文、変体漢文、和漢混淆文における使用状況を調査・整理することを通して、接続助詞的に用いられる「によりて」の文体的性格を考察した。『万葉集』の段階では、「により(て)」の文法化の度合いが未だ低く、論理的な原因理由を伝達する表現として、実用性を求めている韻文では接続助詞的用法が現れにくいと考えられる。「により(て)」は実用的な用語として、和文においても男性の会話文や原因理由を強調的に言う必要がある部分に用例が現れやすいが、用法の面から、表現上のバラエティがあり、接続助詞的用法としての発達が認められる。一方、漢文訓読文では、元の漢文の文脈に左右されるため、「ニヨリテ」の用言接続の比率が低くなり、「により(て)」の接続助詞的用法の成立に影響した可能性は低い。変体漢文において、「ニヨリテ」は用例が多いものの、「依有……」「依無……」のような存在表現に接続する例が多い点では、用法上の偏りが見られる。この点は、和漢混淆文での使用傾向にも影響が及んでいると考えられる。このように、「により(て)」の接続助詞的用法は、日常言語を基盤に発生し、和文、漢文訓読文、変体漢文、和漢混淆文に共通して、広く原因理由の接続表現として定着したと捉えられる。

第二章では、原因理由を表す接続表現「(が) ゆゑに」の成立と発展を考察した。まず、第一節では、『万葉集』における「ゆゑ」を用いた歌を取り上げ、特に逆接の意味に解釈されることが

ある歌を再検討することを通して、上代の「ゆゑ」は形式名詞、或いは、接尾辞的なものとして用いられており、中古以降の論理的な因果関係を表す接続表現とは異なり、後続事態を起こさせる偶然的原因を示す表現にとどまっていたことを明らかにした。この結果を受けて、第二節では、接続助詞的に用いる「ゆゑ」を取り上げ、中古・中世の各文体における形態や用法の検討を通して、漢文訓読文で発生し、和文、和漢混淆文へどのように受け継がれたかを考察した。その結果、上代では、「ゆゑ」が形式名詞のように用いられる場合では、必ず体言につき、用言につかないという制約があった。平安時代になると、漢文訓読文では、体言接続が「体言＋ノユエ」の形で定着した。用言接続では、初期の訓点資料において、「活用語連体形＋φユエ（故）」が「活用語連体形＋ガユエ（故）」とともに自由に用いられていた。ただし、両者が併存していたのではなく、平安中期になると、「活用語連体形＋φユエ（故）」の訓法は次第に姿を消したが、「活用語連体形＋ガユエ（故）」が定着し、複合辞「(活用語連体形) ガユエニ」が固定化した原因理由の接続表現となった。一方、和文において、体言接続では、上代と同様に、「体言＋φゆゑ」が中心に用いられている。用言接続では、平安中後期の和文作品に「活用語連体形＋φゆゑ」が原因理由の接続表現として用いられるようになった。他方、院政期の歴史物語『栄花物語』と『大鏡』のように、「活用語連体形＋φゆゑ」と漢文訓読文で固定化した「活用語連体形＋がゆゑ」との両形を同時に用いる作品もある。このような接続助詞的に用いる「ゆゑ」は、和文では、漢文訓読の要素が徐々に浸透し始める平安中後期の作品に見られるが、用例の多くは漢文が出典となる部分や、漢文に馴染んでいた人物の会話文や、仏教行事のような特定の場面に限られている。このような流れを受けて、『今昔物語集』などの院政期の和漢混淆文において、用言接続では、「活用語連体形＋ガ故」を中心にしながら、「活用語連体形＋φ故」をも併用していたが、鎌倉期の作品では、「活用語連体形＋φ故」の形を中心にして、自由に用いられるようになった。このように、和漢混淆文において定着する「活用語連体形＋φ故」は、漢文訓読文に源をもつが、漢文訓読文では衰えるものの、僧侶の実用文などで保存されたと考えられ、和漢混淆文を特徴づける表現の一つになっていると考えられる。

第三章では、接続詞「しからば」と「さらば」の用法の交渉を考察した。第一節では、上代文献における「しからば」の仮名書きの例とその訓が想定される漢字の例を挙げ、その用法を考察し、それらが漢籍・仏典の用法をいかに受け継いでいるかを検証することによって、接続詞「しからば」の発生について論じた。「しからば」の後続表現から見ると、『日本書紀』に見られる「然則」「然即」の後続表現は、疑問表現と推定表現の例が中心であった。これは漢籍の「然則」や仏典の「若然者」の使用状況と一致している。一方で、『万葉集』の仮名書きの例は疑問表現をとっているが、『古事記』に見られる「然者」の後続文には意志表現と命令表現に偏る特徴が見られた。このような『古事記』の傾向は、『万葉集』の例も含めて、日本語において独自に生じた接続詞用法と考えられる。このように、「しからば」は上代の日本語に自然に生じたもので、文体的な特殊性を帯びず、後続表現にも広がりを持つものであったことを述べた。第二節では、中古以降、同義語として認められる訓読系統の「しからば」と和文系統の「さらば」の用法について、文体による用法差を検討した。中古和文では、「しからば」は用いられないが、「さらば」は日常会話語として用いられ、その後続表現には疑問表現が続く例がやや少なく、意志表現、命令表現、推定表現が続く例が幅広く見られる。この点からも、第一節の結論が肯首される。一方、第一節で確認した結果、漢文訓読文では、「シカラバ」の用例は少ないが、用法は極端に疑問表現と推定表現の条件を表す用法に固定化している。時代が下るにつれて、「しからば」が取り入れられた和漢混淆文では、「さらば」の用法が大きく偏るようになり、意志表現と命令表現が続く例が中心となるようになった。このように、「さらば」と「しからば」には、用法の分化が見られ、それぞれの中心となる用法を異にするために和漢混淆文において併存し得たことを指摘した。

第四章では、接続詞の文体との関わりを見るために、『今昔物語集』、および『今昔物語集』の

出典とされる純漢文の『冥報記』、変体漢文の『法華験記』、和文として類話を持つ『宇治拾遺物語』などの文献における使用傾向について、数量的調査を行った。その結果、漢文訓読調が強い天竺震旦部と本朝仏法部では、順接の接続詞においては、因果関係を明確に表現する接続詞「このゆゑに」「これもちて」「これによりて」と、より論理的思考が必要とされる逆接の接続詞「しかりといへども」「しかるに」「しかるを」が多く見られる。それに対して、本朝世俗部に頻用されるのは、「然れば」「さて」「かくて」などのような、時間の経過、あるいは事件の羅列を示すだけで、論理的関係からいうと、より曖昧に表現されるものである。これによって、漢文訓読調に傾く『今昔物語集』の巻二十以前では、より論理的な表現をとっていることを指摘した。

このように、因果関係を表す接続表現について、個々の表現への考察と数量的調査を通して、条件表現形式の論理化や因果関係を明示化する接続表現の発達する傾向は従来室町時代以降とされているが、それに先立ち、院政鎌倉時代の和漢混淆文において、その傾向が既に見られることが指摘できる。その背景には、漢文訓読、特に仏教漢文を訓読した営為が大きく関与していることを明らかにした。